
しろクロ（リニューアル）

月冴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しろクロ（リニユール）

【Nコード】

N6745K

【作者名】

月冴

【あらすじ】

東京新宿にある古びた雑居ビル二階に居を構える何でも屋「チエス」。

お金さえ払ってくれば何でもやります。がモットーの裏稼業、そこでオーナー代理をしているクロはある日、依頼で一人の少女を誘拐する事に。

始まったのは複雑な日常、訪れたのは歪な日常、少年と少女が織りなすものは

グダグダかもしれませんが、どうぞ。

序章 少女誘拐

東京新宿。

そんな言葉を聞くと、思い浮かべるのは極東にある島国『日本』の首都だと人々は思うだろう、東京には美味しい物も高い物も珍しい物もあり、様々な国の人間が日常を送っている。そんな街だ。

だが、人が集まる街には必ず裏の顔もある。

無論、平和ボケしているこの国も例外ではない。

そんな国の首都に居を構える何でも屋「チエス」に一人の少年がいた。

少年の名はクロ、もちろん偽名。

こんな名前は猫くらいしかないだろう。と本人も思っていたりする。

そんな猫の様な名前の少年は一枚の紙を見ていた。

依頼書、と書かれた一枚の紙。

「私の娘を攫ってほしい」という簡潔な一文が書かれている。

さらに紙が入っていた封筒には一億の小切手と娘と思われる少女の写真。

「さて、どうしようか。金は貰ったけど……誘拐、か」

そんな事を呟いても始まらないと分かっているが、どうもテンションが下がり気味なクロであった。

しかし、依頼は依頼なのでしっかり遂行しなければならない。

「気分は乗らないけど仕方ないよな、つうか自分の娘誘拐させる

とか。どんな親なんだろうな、顔見てみたいし、文句も言ってやりてえーな」

だがやっぱり気が乗らず、イライラしてしまう。

クロは新宿という夕暮れの街へ足を運ぶ。

標的（娘）は毎週この時間帯に塾に通っているらしく、そこを狙えとの事だったので待ち伏せているのだ。

クロの格好は黒猫のように黒づくめの衣服だった。

黒のロングコートに黒のズボンに黒い靴、黒い手袋と、とにかく黒一色。

「もう三月なのに、まだ寒いな。本当に温暖化なんて進んでんのか？ 寒冷化の間違いだろ」

と、愚痴るくらいに気温は低かった。

まあ低気圧等の様々な要因が重なって局地的な寒さだったが。

「あれか」

クロの視線の先には黒塗りの外車が一台停車し、プロレスラーの様な体つきの男が運転席から出て、誰かを待っているように見える。

「絶対いい（、（と）（この）（、（お嬢様だな、まあ親はろくでなしだろうが」

そんな事を言っていると、ビルから一人の少女が出てきた。

写真の少女、つまりは標的だ。

クロは殺気と足音を殺し、風の如く運転手との距離を縮めるとポ

ケットから五センチほどの筒を取り出し、素早く運転手の首筋に筒を押し付ける。

プシュツ。という音と共に運転手は地面に崩れ落ちた。

少女は突然のことに動揺して固まっているが、それも束の間、クロは少女を黒塗りの外車へ少々乱暴に後部座席へと押し込め、自分は運転席に座り、車を発車させた。

行動の開始から僅か三十秒で少女の身柄を確保したのだ。

「あ、あの」

少女は酷く怯えた様子でクロに声をかける。

バックミラーで少女を見るが、反抗する様子は微塵も感じなかった。「何だ？」と返事をする。

「ど、どなたでしょうか？」

「誘拐犯」

簡潔に答えてみるが、少女はそんな事は見ればわかります。と言わんばかりの表情を浮かべた。

詳細を知るクロはちよつと可哀そうかな。と思い少し話をすることにした。

「俺の名前はクロだよ、鳳凰院曆ちゃん」

「へっ？ な、なんで私の名前知っているんですか！」

「いや、誘拐犯なら誘拐する相手の身元くらい普通調べると思っているんですか？」

「あつ、そ、そうですね。………すいません」

「ほかに聞きたいことはある？」

「えーっと、なんで誘拐されたんですか？」

いきなりそこを聞くか、とクロは思う。

自分の親が誘拐をしてくれ。と頼んだと知ったらどんなに悲しいだろうか、と常のクロなら思わないことを思う。

「依頼されたからだよ」

と少し遠回しであるが質問に答える。

次に来る質問を知っていながら。

「誰にですか？」

「君の親さ」

……。

沈黙。

車内にはエンジン音だけが響く。

しかし、この沈黙は案外早く終わりを迎えた。

少女の言葉で。

「やっぱり、そうですね」

「やっぱり？」

思わず聞き返してしまうクロ。

しかし、少女は事も無げに「両親と大喧嘩をしたんです」と答える。

喧嘩程度で娘を誘拐させるのか？ とクロは驚かすにはいられなかった。

「へ、へえー 最近の親は凄いな」

「いえ、たぶんうちくらいなものですよ」

と苦笑いを浮かべる少女。

いや、それもどうかと思う。と言おうとしたが言葉を呑み込み、災難だね。という一言に集約した。

そんなやりとりをしていると、見慣れた雑居ビルが近付いてきたので速度を徐々に落とし、最終的には雑居ビルの入りローメートルほどの所で停車した。

「ここは？」

「我が家さ、こんな見てくれだけどね」

「いえ、素敵だと思います。成金丸出しな私の家と比べたら」

ははは。としかクロは言えなかった。

「まあ、付いて来て」

はい。と少女は返事をしてクロの後に続き、クロは少女がエレベーターに乗った事を確認すると、3Fと書かれたボタンを少々乱暴に押し、ブオンツ。という起動音と共にエレベーターは上昇を始めた。

チンツ。という機械音が鳴ると扉が開き、すっかり暗くなった新宿の夜空が二人の眼に映った。

まだ冬の寒さを感じられる夜風に当たりながら二人は足を進め、「チエス」と書かれた立て看板が置かれている扉の前まで来ると、「少し散らかってるけど、我慢してくれ」とクロは苦笑いを浮かべながら少女に言う。

少女も、まあ男の子が一人暮らしをしていたら仕方ないだろう。と思い、うん。と短く返事をする。

そして扉が開かれると、少女の予想は少し外れた。

確かに少々散らかっているが、これなら潔癖症でもない限り許容

範囲だろう。誰もがそう思える程度の散らかりようだったのだ。

「意外と綺麗ですね」

「まあここは事務所兼応接間でもあるから、台所は汚いの一言さ」

「あー そういう意味だったんですか」

「そういう意味だよ。何せ食事なんてここ最近まともに食ってないから、皿とか浸けっぱなし、案外カビの温床になってるかも知れないな」

「でも悪臭はしませんよ？」

「台所はこの部屋の真上にあるんだよ、ちなみにここ一番端の部屋だけど、隣の部屋との壁ぶち抜いてその部屋に階段取り付けて、上の階の二部屋もウチの所有だから好きに使ってくれて構わない」

もうここまで来たら少女には苦笑いを浮かべるほかなかった。

まさか壁をぶち抜いているなんて予想もできなかったからだ。

それに上の二部屋も同じなんてスケールが大きいな。と驚きを通り越して感心するほどだ。

「ああ、でも出入り口はこの一つだけだから」

とクロはそう言ってロングコートをデスクのすぐ近くに立ててある服かけに掛ける。

「あ、はい」

「ん？ なんだ。これ」

クロは自分の机の上に置かれている一枚の紙に視線を刺す。

こんな物は出て行く時には無かったはずだ。とクロは思うが、気になるので手に取ってみると衝撃の一言が書かれていた。

『娘に社会勉強をさせてやってくれ』と書かれていたのだ。

そして少年と少女の日常は始まりを告げた。

間章 鳳凰院家とマスター

ある家のある部屋に二人の男が雑談をしていた。

ある男は四十代にしては初老の雰囲気醸し出し、向かい側に座る男は三十代とは思えぬ程に若々しかった。

「それにしても、まさか自分の娘を誘拐して欲しいなんてね」

「我々にも色々と事情があるんですよ、だから貴方に頼ったんです。それにしもよかったですか？」

「何が？」

「貴方の黒猫に会わなくて」

あー。 と若々しい男は思い出したかのように声を発し。

「もう独り立ちの時期だしね」

と、納得した風に言い。

目を瞑って一口紅茶を味わうと、重圧な雰囲気放ちながら目を開き、

「それに彼は私の息子ですから、そろそろ極東の支部くらい任せても大丈夫でしょう」

と言葉を紡いだ。

「しかし、有名過ぎるのも考え物ですな」

「それには賛成、私達は少し有名になりすぎた」

色々と思うところがあるのか、若々しい男の顔には疲労の影がチ

ラホラと窺えた。

また、四十代の男も苦笑いを浮かべる。
共感できる部分があったのだ。互いに。

第一章 始まる日常

少女こと鳳凰院暦がクロに誘拐されてから一週間が経とうとしていた日曜のお昼前。

この数日で暦は劇的な変化を体験した。環境の変化、価値の変化、待遇の変化、そして自分の名前の変化。名前の変化とは、どういう事か、簡単に言ってしまうえばクロと過ごす間の名前を付けられたのだ。

「しろちゃん、今晚は肉が食いたい」

「ダメですよ！ 今晚は野菜を中心としたヘルシーコースを堪能してもらいます！」

しろ。それが今の少女の名前だ。

最初は受け入れがたかったが、人は慣れるもので。二日を過ぎた辺りから抵抗なく受け入れるようになった。

そして、しろが攫われた事は案外大事にはならず。

裏でも噂程度の話しか流れなかった。

依頼主である鳳凰院家は、財政会ではVIPで政治家とも濃い関係を築いている事で有名な家なのだ。

真実の一つや二つ消すのは容易い。

だから、誘拐させてもマスコミも報道せず、きつと通っていた学校にも手は打ってあるだろう。

結局、大喧嘩一つで鳳凰院暦は家を追い出されたのだ。

まあそのうち戻る事は確定しているが、何せこれは『社会勉強』という事らしいのだから。

「それにしても、クロ君。お客さん一人も来ないね」

「大丈夫。ウチは高いから、一回でも依頼が来たら一年は問題な

く暮らせるし、来なくても貯金は一生遊んで暮らせるくらいあるから」

「でも、それって」

「まあ、汚いお金。なんだけど」

「真っ当に働こうとは思わないんですか？」

「いや、汗水流して働いているんだけど」

「方向性が違います！ 警察と犬猿の仲の仕事が真っ当って言うるんですか!?!」

「世間一般的に言えば……言えないな」

「でしょ!?!」

こんなやり取りが毎日一回は必ずある。

しろはクロに真っ当な道を歩んで欲しくてこう言うのだが、当の本人は一つのコミュニケーションとしか受け取っていないのが現況だ。

そんな意識の違いがある時点で、しろの望む通りの結果など得られるはずもなく、平行線を辿っている。

「いや、でも良い事もしていると思うぞ？」

「例えば？」

「ん〜 そうだな。最近だと麻薬売り捌いていたカルテルを一つほど潰した」

「……詳しくは聞きたくないけど、逮捕された人は？」

「○人」

……。

意味するのは一つだとしろは確信した。

生き残った人が居なかったのだ。

クロ以外は。

「そんな事はもう止めなさい！」

「え〜 そりゃー 無理だよ。『チエス』は俺じゃなくてマスタ
ーのもんだし、勝手に廃業する分けにはいかない」

「もー！」

しろは自分も平然とこんな会話できる時点で、自分も一般人では
ないな。と少し自嘲する。

そもそも家が家だけに、裏の世界にもそれなりに精通していたり
する。

だから『チエス』に誘拐させたんだと、しろは理解していた。

裏世界で『チエス』ほど有名な言葉はない。

少々依頼料は高いが、依頼すれば大抵の事は叶えてくれるのだから、まああまりに非人道的だった場合断られる事があるそうだが、
それ以外では完璧を誇る何でも屋。

テロリストの情報から、大国のスパイリスト、武器商人の紹介、
偽造IDの提供まで、ありとあらゆる犯罪行為の助成及び実行を生
業としている。

そんな極悪集団の一人がクロなのであった。

しろとしては到底信じがたい事だが、一応信じている。

何せ親が誘拐させたのだから、中途半端な悪人ではないだろうと
思っているのだ。

「しろちゃん、そんな事より今晚の食事の話を」

「もう、とにかく今晚は野菜オンリーでいきます！」

「え〜 なら、せめて魚を！」

「う〜 まあ、いいでしょう」

そんなほのぼのとした会話をしている時だった。

不意にチャイムが鳴ったのは。

「お客さんかな？　しろちゃん」
「はい」

しろはクロに促されてお客さんを迎えに行く、只今しろは『社会勉強』中という事でクロの助手をしているのだ。

「今、開けます」

そう言っしてしろは扉を開くと、三十代くらいで顎に髭を蓄えた男がいた。

タバコを口に咥えていた男はしろを見ると少し驚いた風の反応を見せて、タバコをエチケツト袋に押し込める。

「新人さんかい？」

男は唐突にしろに言葉をかけた。

「え、ええ。そうですけど」

ふーん。と男は鼻で返事をし、室内に入った。

「クロ、年端もいかない一般人の少女を雇うなんて。一体どんな心境の変化があったんだい？」

「何の用があつて来たんだ？　どうせ本職の用なんだろうが」

「ふふ、分かつてるじゃないか」

男は敵な笑みを浮かべながらソファーに座るとポケットからタバコの箱を取り出し、慣れた手つきで箱からタバコを一本口に咥えようと、クロが咳払いを一回する。

男は一瞬意味深な表情を浮かべるが、しろに気が付くと、なるほど。と納得した顔でタバコを箱に戻す。

「この前、禁煙するって言ってなかったか？」

「ん？ あー あれは健康診断までの期間限定さ。というか僕からタバコを取ったら何が残るといふんだい？ そもそもタバコは害だ。って風潮が僕には理解できないし」

「安心しろ、俺もアンタのニコチン中毒っぷりが理解できないから」

「おいおい、それじゃー 僕が中毒者ジャンキーみたいな言い方だね」

「そう言っただよ、発ガン物質が脳にまで回ったか？」

「相変わらずだね」

「アンタもな、で？」

「ああ、お話を聞かせてくれないかな？」

男は満面の笑みでクロに接するが、クロは少し棘のある接し方だ。しろは、この二人仲が悪いのかな？ と心配するが、実は案外似た者同士である二人は互いの思惑が解っており、あえてこういう風に接していた。

そして一番の原因は男の職業になった。

「何の話を聞きたいんだ？ 刑事さん」

「え！ 刑事さんだったんですか！」

しろは心底驚いた表情で思わずクロの言葉を疑う。

その言葉を聞いて男はショックだったのか、苦笑いを浮かべる。

クロはそんな男の表情を見て笑いをこらえていた。

しろもそんな二人の反応を見て自分の言った言葉を「軽率でした」と反省する。

「まあ、こんなオッサンだけ刑事をしてるんだよ」

「す、すいません」

「謝らなくていいよ、ソイツが刑事に見えないのは周知の事実な

んだから」

はあ。と、しろは遠慮気味に返答し、少しの罪悪感を抱き、せめてものお礼に。とお茶を入れるために給湯室へ向かった。

それを見届けたクロはしろが二階へ上がった事を確認すると、しろと接する時からは想像もできないほど刺々しい雰囲気が変わり、刑事を見る。

「さて、しろちゃんは席を外したし。もういいんじゃないか」

「そうだね。本題に入ろう、って言いたいんだけど、そうも行かなくなつた」

刑事は、ヤレヤレ。とため息交じりにタバコを取り出して火をつける。

クロもため息を吐いて換気のために窓を開けた。

「あの娘、一体どこの誰なんだろうね」

と、意味ありげな言い方で刑事はクロに語りかける。

クロは、呆れた風に「一般人の少女だけど？」と望み通りの言葉を返す。

その言葉を聞いた刑事はふうー、と煙を吐き出すと、「そう？

僕はてつきり誘拐でもしてきたんじゃないかと思っただけだ」と、真相を突く。

だが、クロはそんな事じゃ動揺の色を見せない。

それなりに場数は踏んでいるのだ。

「誘拐された少女があんな風に働くかよ」

と、何をバカな事を言っている。なんてニュアンスで返す。

「そうなんだよね、そこが引つ掛かるんだ」

それでも刑事は食ってかかる。

第六感的な物が働いているんだろうか、とクロは思うが、刑事も職業柄あまりにも不確実な事で相手を落とせるとは思わず、新たな手に打って出る。

「でも、最近鳳凰院のご令嬢が誘拐されたって言うじゃない」

そう、クロの動揺を誘い、不確実を確実に変える事だ。

さすがのクロも多少の動揺はするだろう。と刑事は思うが、クロは予想に反して「貴重な情報をありがとう、酒でも奢ろうか？」と礼を述べたのだ。

これには刑事も驚き、それと同時に諦めた。

「いや、遠慮しとくよ。で、ここに来た目的なんだけどね」

「やっと本題か、それよりまずタバコを始末しろ」

と刑事を促す。

刑事もしろの足音に気が付き、はいはい。とタバコを始末する。

「どうぞ、粗茶ですが」

しろは刑事の前に温かいお茶と茶菓子の羊羹を出した。

クロにはお茶のみ。

刑事はお茶を一口飲み、ありがとう。と礼を言つと羊羹も一つ胃袋に収めた。

「それでクロ、一週間前に麻薬カルテルが消されたの知ってるだ

る？」

「ああ、聞いているが。それがどうした？」

「誰がやったか教えてくれないかな？」

イヤラシイ。しろは刑事の言葉を聞いてそう思った。

なんたってその表情は誰がやったか大かた解っている顔だったからだ。

それを踏まえてクロに質問している。

だからしろはそう思った。

「ふん、それはとづくに解決済みだろう。俺に勝ちたきゃ、もっと優秀な手で攻めて来なきゃな」

「あらら、お見通しですか」

「友達が多いんでね。色々教えてくれるんだよ」

「へえ〜 政府機関の情報もかい？」

「さあ、どこからどこまでが政府機関の情報かによるな」

水面下の攻防、まさにそれだった。

交渉でもあり、尋問でもあり、ただの質問でもあり、そんな事がこの一室で行われていた。

方や年端もいかぬ少年、方やいい歳をした大人、だがこの場において「年齢」なんて概念は通用しない、互いに「プロ」であるが故に譲歩も妥協も一切しない、絞り取れる物は絞り取り、自分に有利に事を運ぼうとする。

刑事は「そう」と言葉を区切り、「じゃあこの前貰った情報のお礼をしようかな」と言葉を紡いだ。それは同時に交渉でもあり、尋問でもあり、質問でもある時間の終わりを示していた。

「報酬ならもう受け取っているけど？」

「何、今後とも宜しくって事さ」

「そういう事ならありがたく聞かせてもらおうか」

刑事はクロの返事を聞くと、ニコツと笑みを見せ語り出す。

「最近、ドラッグメーカー薬製造機って言葉よく耳にするだろ？ 次の標的が新宿らしいんだよね。だから精々夜道には気をつける事だ」

そう言っつて刑事は立ちあがり、じゃあね。と足早に帰路に就いた。しろは刑事が雑居ビルから立ち去るのを窓越しに確認すると、お茶を下げ、クロに訪ねた。

「薬製造機って何ですか？」

「ん？ ああ。最近よく聞くようになった同業者の呼び名だよ」「違法薬物とか売ってるって事ですか？」

しろの言葉にクロは少し苦笑いにも似た表情を浮かべ、はは。と笑う。

「それくらいなら可愛げがあっつていいんだけどね」

と言葉を漏らす。

しろはすぐさま思考を働かせ、答えを模索するが、如何せん情報が少なすぎた。

結局はクロに聞く以外に術はなく、「それはどういう意味ですか？」と質問をする。

「違法薬物は勿論、バイオウエボン生物兵器とかも売ってるんだよ」

「それって、テロリスト!？」

「そうじゃない、ただ売ってるだけさ。マッドサイエンティストがね、その上ソイツの性格が最悪でね、正直顔を思い出すだけでも

なるほど。と、しろは思う。だが心配な部分も当然思いつくわけ
で。

「でも、それって」

しろが言い終わる前にクロは答えだけを述べる。

「あつたんだよ。向こうが裏切ってその報復に警察署が丸ごと一
個吹っ飛んだ事がね」

しろは今度こそ納得した。

持ちつ持たれつの関係、ギブアンドテイク、綺麗事だけじゃ世界
は回らないと確信を得た瞬間だった。

第一章 始まる日常(2)

太陽が一番高く上っている時間帯に一人の来客があった。

「まったく。いきなり呼び出しながらいい度胸ね、クロ」

「そんなに怒らないでよ、嵐。俺だってお前を急に呼び戻すつもりはなかったんだ」

「へえ〜 じゃあ何でいきなりロシアから呼び戻されたんのか説明しなさい！ あとこの子は誰!？」

と、嵐と呼ばれた名前からは連想できない西欧系の少女はしろを指さす。

指さされた本人は「あわわ」とうろたえ、クロは「はぁ」とため息を漏らす。

嵐は「早くしなさい！」と機嫌が悪くなる一方だが、この状況は一人の人物の登場によって改善の方向へと向かった。

「誰、ですか？」

しろは、いつの間にか立っていた見知らぬ男にその声を掛けた。

衣服の上からでも分かる筋肉、髪型は短髪で少し白髪が交じっている、そして何よりも気になるのはその来ている服だ。

「私の名前は本庄隆士ほんじょうたかし、防衛省で働いている者だ」

「やっと全員揃ったか」

クロは待ち草臥れたように言っソファに座るように勧める。

自分も椅子に座り、電話を誰かに掛けるとスピーカーに切り替えた。すると、『ハ〜イ、やっとみんな揃ったみたいね』と陽気な女性

の声が電話から聞こえ、少し緊迫していた雰囲気が一気に吹き飛んでしまった。

「全く、君は相変わらずだな」

そう呆れた様に本庄は呟き、「ホント、引き締まらない奴よ」と、嵐は慣れた様に言葉を吐く。

「やれやれ、それよりも本庄さん。詳細を」

クロに言われ本庄は咳払いを一回し、場の雰囲気を取り替わらせる。

「先日、国際指名手配中のある人物が国内にいる事が判明した。本来なら君達の手を借りる必要はなかったんだが、目的が生物兵器の売買という極めて繊細な事と判明したため、プロに任せよう。政府が判断したわけだ。私としては納得いかないが」

「何言ってるの、それが正解だつづの。政府機関にはうじゃうじゃスパイが居るんだから」

本庄の言葉に嵐はつつかり、早くも喧嘩腰の二人をクロは「喧嘩するんなら余所でやれ」とクロなりになだめ、「そこで今回は本庄さんにもメンバーとして参加してもらい、本件を早期に完遂させる。完遂条件は生物兵器の回収と作者の確保、又は抹殺だ。サポートはいつも通り木原さん、それと今回が初仕事のしろちゃん」と、クロはしろに視線を向ける。

「し、しろです。よろしく願います!」

しろは視線の意味を理解して自己紹介する。

少々不安を感じさせる自己紹介だが、この場にいる人間は少なからずクロという人間に信頼を置いているので、クロが選んだんだから大丈夫だろう。と心の片隅で思っている。

なので、『よろしくね』 分かんない事があつたらお姉さんに遠慮なく聞きいてOKよ』や『ミスつたら何か奢つて貰うから』とか、『報酬は週末に振り込んでおくから後で詳細を詰めよう』などの言葉をしるに掛ける。

どの言葉も不器用ながら優しさを感じられるものであつた。若干一命を除いて。

『お姉さん、前から妹が欲しかったのよね』 しろちゃんは可愛
いから私の妹決定』』

「別にいいですけど。木原さん、変なこと教えなくてくださいよ」
「大丈夫、妹にそんな事しないわよ。でも、うふふ」

だが、しろはやはり不安を感じられずにはいられなかった。
いろんな意味で。

「そんじゃまあ、いつも通り各々進めるって事でいい？」

しろを除いた全員が首を縦に振り、クロから無線機らしき物を受け取り、新宿の街へと散った。

「しろちゃんは基本ここで木原さんと協力して全員のサポートをお願いね」

「は、はい！」

「さて、木原さん。報告お願い」

「ほいほい。えーとね、調べた限りじゃあ今のトコ怪しい動きを見せる組織は無いね、一応怪しいトコはマークしてるけど、私の予想じゃ動かないね。あとは……政府機関が活発に動いてる、防衛省

関係が特に」

クロは聞き終わると、「じゃあ電話は切るけど、あっちの方は繋げといて」と言い、電話を切った。

「あのー 木原さんって何者なんですか？」

「ウチの専属情報員、今は防衛省情報本部で働いてる。勿論偽名で」

クロの言葉を聞いて、スケールの大きさに驚くしろ。

そして政府の危うさを心配する。

自分の国を治めている政府はちゃんと機能しているのだろうか？と軽く疑ってしまう。

何はともあれ、しろは自分の仕事を全うする為、パソコンを隣室から持ってきて配線を繋げ、木原とラインを繋ぐ。

「あー 木原さん。聞こえますか？」

『うん。感度良好』 画面も鮮明だよー あー 我が愛しの妹ち

ゃんは可愛えーのお〜』

あはは。と苦笑いするしかないしろであった。

クロは二人のやり取りを聞きながら、自身の身を守るための装備を整えた。

「じゃあ、外行ってくるわ」

「行ってらっしゃーい」

しろはクロに手を振る。

まあクロは見ていなかったが。

『その顔は無視されたか』

「……はい」

『クロは照れ屋さんだからね』

「照れ屋さん。ですか」

『そうそう、ウブとも言っね』

意外な事実を知ったしろであった。

そして初めて木原という人間に、良い方向の感情を抱いた瞬間だった。

間章 枯れぬ正義

『チエス』を後にした刑事は公園で一服していた。

この男の名前は風上讓、今年で三十歳になるオジサンである。

同僚からは若輩ダンディズムというあだ名を付けられるほど、少し老けている。

そんな男が平日の昼下がりに公園のベンチで一人タバコを吹かしている、妙に哀愁を漂わせる。

こんな男が刑事と思う人間は誰一人といたないだろう。

「ふうー クロには伝えたいし、後は自分で動くだけか」 ほんと
「ダライ」

「あー 先輩見つけましたよ！」

讓に向って声を上げるこの女、名前を馬場都（はば みやこ）という二十三歳女性、トレンドマークはハーフ故の金髪だ。

都はベンチで黄昏れている讓の前に立つと、慣れた手つきで啜えているタバコを取り上げ地面にたたきつけて靴でタバコを踏みつけて火を消す。

「あーもー 人の楽しみを奪う事ないじゃん、都ちゃんはちよつと焦りすぎ。本番じゃ苦労するよ？ 相手の事も考えなきゃ」

讓の言葉に都はこめかみの辺りをピクつかせ、額には青筋を浮かばせて、「何でいつもそっちに話を持って行くんですか！ 私の彼は文句一つ言ってきたません！」とややズレタ反論をする。

「ええー 都ちゃんに彼氏が居たの！」

「意外だ！ って顔しないでください！ 私だってもう二十三な

んですから、彼氏ぐらいいます」

「いいなー 僕も早く伴侶見つけないとな」

「先輩、それよりも部長が怒ってましたよ。また譲はサボりかあ！ っつて」

「はは、雅さんは大丈夫。慣れてるだろうから」

「はあー 怒られるのは私なんですよ？ でも仕事は上手くいったようですね」

「まあね、本庄君も動いたようだし。後は僕らがやるべき事をやり遂げるだけさ」

譲は今まで腑抜けた瞳だったが、今は強く意思が光っていた。都は、ホッと胸をなでおろす。

やっとやる気になってくれたのか。と安堵したのだ。

「それよか、都ちゃんの方も上手く行ったんだよね？」

「勿論です。予定通りに事は運べるかと」

「ならいいや、そろそろ僕らも動き出そうじゃないの」

ベンチから立ち上がり、譲と都は公園を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6745k/>

しろクロ（リニューアル）

2010年10月10日00時14分発行